

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

| | |
|--------------------------|--------|
| 学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要） | 研究 0-1 |
| 1. 美術学部・美術研究科 | 研究 1-1 |
| 2. 音楽学部・音楽研究科 | 研究 2-1 |
| 3. 映像研究科 | 研究 3-1 |

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

| 学部・研究科等 | 研究活動の状況 | 研究成果の状況 | 質の向上度 |
|------------|-------------|----------------|------------|
| 美術学部・美術研究科 | 期待される水準を上回る | 期待される水準を上回る | 改善、向上している |
| 音楽学部・音楽研究科 | 期待される水準を上回る | 期待される水準を上回る | 高い質を維持している |
| 映像研究科 | 期待される水準を上回る | 期待される水準を大きく上回る | 高い質を維持している |

注目すべき質の向上

美術学部・美術研究科

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に、デジタル技術と日本画等の伝統技法を融合した新しい高精度の複製技術を開発し、特許を取得している。この「触れる文化財」、「クローン文化財」を制作する技術を活用し、世界遺産にも登録されている高句麗古墳群の巨大な壁画に描かれた「四神図」の複製に取り組み、30年前のフィルムから原寸大の鮮明な壁画画像を蘇らせ、石室全体の復元に世界で初めて成功するなど、その研究成果を多くの文化施設や展覧会において発表している。

音楽学部・音楽研究科

- 大学附属の演奏芸術センターによる「藝大21」、「奏楽堂シリーズ」及び「藝大プロジェクト」の各種演奏会は、作曲家の全体像を捉える包括的な選曲、商業ベースに乗らないため演奏される機会の少ない作品の演奏、啓蒙プログラム、邦楽アンサンブルを基調とした新しい創造の試み等、大学の特色や強みを活かした企画となっており、個々の教員の個人的な研究活動をベースとしつつ、学生も交えた大学の総力を挙げた取組となっている。

映像研究科

- 第2期中期目標期間に受賞した賞の件数は、国際的な映画祭やフェスティバル、学協会からの賞を含めて合計41件、教員一人当たり2.5件となっており、単に国際的な受賞の数が多いというだけでなく、第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門監督賞の受賞等、国際的に評価の高い賞が含まれている。

美術学部・美術研究科

| | | | |
|----|-------|-------|--------|
| I | 研究の水準 | | 研究 1-2 |
| II | 質の向上度 | | 研究 1-4 |

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における個展等の開催件数は、教員一人当たり合計4.7件、著書及び論文発表件数は教員一人当たり合計2.4件となっている。
- 第2期中期目標期間における受託研究の受入件数は合計172件、共同研究の受入件数は合計12件、受託事業の受入件数は合計86件となっている。
- 平成22年度から平成24年度に、東京芸術大学（G）、台東区（T）、墨田区（S）の連携で実施した「GTS観光アートプロジェクト」は、学内外の様々な分野の研究者、公共団体や市民と連携し、3年間に合計26件のプロジェクトを実施している。
- 平成27年4月に分野横断、融合型の教育研究を推進するための教員組織として「芸術研究院」を新設している。

以上の状況等及び美術学部・美術研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 社会、経済、文化面では、特に芸術一般において卓越した研究成果がある。また、日本画や工芸における伝統技法と、新たな創造、環境、建築及びデザインの視点から見た地域や社会の在り方、文化財保存に関する複製技術の開発等、多様なアプローチの研究を展開しており、内閣総理大臣賞、ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞等を受賞している。
- 卓越した研究業績として、芸術一般の「蒔絵、螺鈿を中心に現代の漆芸装飾表現の可能性の研究」、芸術一般の「佐藤時啓 光—呼吸—そこにいる、そこにはいない展」、美学・芸術諸学の「木彫の可能性について」、美学・芸術諸学の「文化芸術による人々の交流」がある。「蒔絵、螺鈿を中心に現代の漆芸装

飾表現の可能性の研究」は、第 12 回海峡两岸経貿交易会（中国福州）の漆芸展において「銀賞」及び「銅賞」を受賞している。

以上の状況等及び美術学部・美術研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、美術学部・美術研究科の専任教員数は 116 名となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 16 件（延べ 32 件）について判定した結果、「SS」は 5 割、「S」は 5 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 地域との連携を図る「GTS 観光アートプロジェクト」を平成 22 年度から平成 24 年度の間を実施しており、学内外の様々な分野の研究者、研究機関、公共団体、市民等と連携し、地域振興につながるプロジェクトを 3 年間に合計 26 件実施している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第 2 期中期目標期間に、デジタル技術と日本画等の伝統技法を融合した新しい高精度の複製技術を開発し、特許を取得している。この「触れる文化財」、「クローン文化財」を制作する技術を活用し、世界遺産にも登録されている高句麗古墳群の巨大な壁画に描かれた「四神図」の複製に取り組み、30 年前のフィルムから原寸大の鮮明な壁画画像を蘇らせ、石室全体の復元に世界で初めて成功するなど、その研究成果を多くの文化施設や展覧会において発表している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 第 2 期中期目標期間に、デジタル技術と日本画等の伝統技法を融合した新しい高精度の複製技術を開発し、特許を取得している。この「触れる文化財」、「クローン文化財」を制作する技術を活用し、世界遺産にも登録されている高句麗古墳群の巨大な壁画に描かれた「四神図」の複製に取り組み、30 年前のフィルムから原寸大の鮮明な壁画画像を蘇らせ、石室全体の復元に世界で初めて成功するなど、その研究成果を多くの文化施設や展覧会において発表している。

音楽学部・音楽研究科

| | | | |
|----|-------|-------|--------|
| I | 研究の水準 | | 研究 2-2 |
| II | 質の向上度 | | 研究 2-4 |

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 主として学内施設である奏楽堂での教員によるリサイタルや演奏会等の活動を、平成27年度中に100件以上実施している。特に、大学附属の演奏芸術センターとの協働による奏楽堂プロジェクトでは、企画から実施までを複数の学科や専門領域と連携して行っている。
- 受託研究、受託事業及び共同研究の受入件数は、平成22年度の20件から平成27年度の31件へ増加している。

以上の状況等及び音楽学部・音楽研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に芸術一般において卓越した研究成果がある。また、第32回渋沢・クロード賞本賞を受賞しているほか、海外での招待講演を行っている。
- 卓越した研究業績として、芸術一般の「ピエール・クロソウスキー 伝達のドラマトゥルギー」があり、クロソウスキーに関する単著を出版し、その全作品における「伝達」をめぐる一貫した視座を明快な日本語で論じたことが評価され、第32回渋沢・クロード賞本賞を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、特に芸術一般において卓越した研究成果がある。また、第61回尾高賞や第24回芥川作曲賞を含め4件の賞を受賞しているほか、教員による奏楽堂での演奏会等を数多く開催するなど研究成果の発信を活発に行っている。
- 卓越した研究業績として、芸術一般の「彼方、そして傍らに ～ハープと小オーケストラのための（2012）」、「《ラ・ロマネスカⅡ—ペトルッチの遍歴》～管弦楽のための」、「無伴奏ヴァイオリン・デュオ」、及び「オペラ・

日本歌曲の考察」がある。「彼方、そして傍らに ～ハープと小オーケストラのための(2012)」は、ハープの現代奏法を追求し、現代作品へのハープのレパートリーの構築を目指した作品で、第61回尾高賞を受賞している。

以上の状況等及び音楽学部・音楽研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、音楽学部・音楽研究科の専任教員数は86名、提出された研究業績数は12件となっている。

学術面では、提出された研究業績7件(延べ14件)について判定した結果、「SS」は1割、「S」は8割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績6件(延べ12件)について判定した結果、「SS」は7割、「S」は3割となっている。

(※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和)

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 教員の公開演奏等における研究成果発表を積極的に行っており、平成 27 年度に行った奏楽堂等での教員によるリサイタルや演奏会等の活動は 100 件以上となっている。
- 大学附属の演奏芸術センターによる「藝大 21」、「奏楽堂シリーズ」及び「藝大プロジェクト」の各種演奏会は、作曲家の全体像を捉える包括的な選曲、商業ベースに乗らないため演奏される機会の少ない作品の演奏、啓蒙プログラム、邦楽アンサンブルを基調とした新しい創造の試み等、大学の特色や強みを活かした企画となっており、個々の教員の個人的な研究活動をベースとしつつ、学生も交えた大学の総力を挙げた取組となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 芸術一般の「ピエール・クロソウスキー 伝達のドラマトゥルギー」や「彼方、そして傍らに ～ハープと小オーケストラのための（2012）」等の優れた研究業績があり、第 61 回尾高賞や第 24 回芥川作曲賞等を受賞しているほか、海外での招待講演を行っている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 大学附属の演奏芸術センターによる「藝大 21」、「奏楽堂シリーズ」及び「藝大プロジェクト」の各種演奏会は、作曲家の全体像を捉える包括的な選曲、商業ベースに乗らないため演奏される機会の少ない作品の演奏、啓蒙プログラム、邦楽アンサンブルを基調とした新しい創造の試み等、大学の特色や強みを活かした企画となっており、個々の教員の個人的な研究活動をベースとしつつ、学生も交えた大学の総力を挙げた取組となっている。

映像研究科

| | | | |
|----|-------|-------|--------|
| I | 研究の水準 | | 研究 3-2 |
| II | 質の向上度 | | 研究 3-4 |

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- メディア技術を用いた芸術表現を通して、新しい「臨床知」を創出する国際的な拠点になるという目標に基づき、個人の研究に加え、従来の学問区分を横断するプロジェクト型の研究を推進している。
- 横浜市等の自治体や民間企業からの受託事業、受託研究、共同研究等の外部資金によって、産官学連携研究体制を整備している。
- 国内外の研究者や表現者との研究レベルでの交流を活発に行っており、平成26年度に早稲田大学と連携し、日中韓国際映画シンポジウムを開催する等の取組を実施している。

以上の状況等及び映像研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を大きく上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に芸術一般において特徴的な研究成果がある。また、国宝源氏物語絵巻修復の映像記録等の成果をあげている。
- 特徴的な研究業績として、芸術一般の「国宝源氏物語絵巻修復の映像記録（2014、2015年）」があり、国宝源氏物語絵巻（横笛）の修復の様子を最新鋭の超高精細映像によって記録し、後世に記録映像を残す修復事業として、学術的に意義がある研究を行っている。
- 社会、経済、文化面では、特に芸術一般において卓越した研究成果がある。また、第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に受賞した賞の件数は、国際的な映画祭やフェスティバル、学協会からの賞を含めて合計41件、教員一人当たり2.5件となっており、映画はもとより、実験的な映像作品、教育支援ツール、テレビ番組の企画制作等、その研究対象は多岐にわたっている。
- 卓越した研究業績として、芸術一般の「映画『岸辺の旅』の監督・共同脚本」、「短編映画「八芳園」（2014年）の監修」、及び「平面アニメーション

(短編) 作品「マイブリッジの糸」の監督」がある。「映画『岸辺の旅』の監督・共同脚本」は、第 68 回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門監督賞、第 70 回毎日映画コンクール日本映画優秀賞を受賞している。「短編映画「八芳園」(2014 年)の監修」は、第 67 回カンヌ国際映画祭短編コンペティション部門に正式出品されている。

(特筆すべき状況)

- 第 2 期中期目標期間に受賞した賞の件数は、国際的な映画祭やフェスティバル、学協会からの賞を含めて合計 41 件、教員一人当たり 2.5 件となっている。
- 「映画『岸辺の旅』の監督・共同脚本」は、第 68 回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門監督賞、第 70 回毎日映画コンクール日本映画優秀賞を受賞している。「短編映画「八芳園」(2014 年)の監修」は、第 67 回カンヌ国際映画祭短編コンペティション部門に正式出品されている。

以上の状況等及び映像研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、映像研究科の専任教員数は 20 名、提出された研究業績数は 8 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 1 件(延べ 2 件)について判定した結果、「S」は 10 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 7 件(延べ 14 件)について判定した結果、「SS」は 6 割、「S」は 4 割となっている。

(※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和)

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 作家主導の映画製作や作品制作だけでなく、情報、ヒューマノイド、社会システム、認知科学、医学・医療との境界領域等、研究対象分野の多様性を考慮した研究プロジェクト編成を進めている。
- 国内外の研究者や表現者との研究レベルでの交流を活発に行っており、平成26年度に早稲田大学と連携して日中韓国際映画シンポジウムを開催し、平成27年度に立教大学と連携して映像研究科の教員が映画「自由なファンシィ」の監督を務めるなどの取組を行っている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間に受賞した賞の件数は、国際的な映画祭やフェスティバル、学協会からの賞を含めて合計41件、教員一人当たり2.5件となっており、単に国際的な受賞の数が多いというだけでなく、第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門監督賞の受賞等、国際的に評価の高い賞が含まれている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 第2期中期目標期間に受賞した賞の件数は、国際的な映画祭やフェスティバル、学協会からの賞を含めて合計41件、教員一人当たり2.5件となっており、単に国際的な受賞の数が多いというだけでなく、第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門監督賞の受賞等、国際的に評価の高い賞が含まれている。